

慧思の法華三昧前方便の考察

鶴 田 大 吾

一、はじめに

『隋天台智者大師別伝』（以下『別伝』）には法華三昧前方便の記述があり、この前方便の解釈として横超慧日氏や橋本真昭氏⁽³⁾の解釈がみられる。両者の見解は智顗（五三八～五九七）の著述等から解釈したものといえるが、一方で慧思（五一五～五七七）の著述等から法華三昧前方便とはどのようにみることができなのか。そこでまず重要な点として慧思の思想に『無量義經』の影響が窺えることである。慧思に『無量義經』の影響がみられることはあまりいわれていないが『觀普賢菩薩行法經』（以下『普賢觀經』）と『法華經』の三經をもつて慧思の法華三昧が成り立つものと考えられ、『無量義經』と『普賢觀經』の両經に前方便としての意義が認められるというのがこの論の結論の主である。

二、『安樂行義』の法華三昧

『安樂行義』では、菩薩摩訶薩の行処としてまず諸法実相を觀じて三忍を実践することを勧める。三忍とは衆生忍、法

忍、大忍のことで慧思はそれぞれについてその意義を述べるとともに菩薩行としてのあり方を追及し、ここに慧思の法華三昧が明かされるものと思われる。それは空觀に立ち、衆生の機根の差別をして方便をもつて衆生を教化していくものである。⁽⁴⁾そして大忍では、

爲^レ度^二衆生^一。色身智慧對^レ機差別。一念心中現^二一切身^一。一時說法一音能作^二無量音聲^一。無量衆生一時成道。

（大正四六・七〇二中）

とあって、菩薩が衆生を救済するために色身と智慧によつて機の差別に対応して、一念心中に一切身を現じ、一時に說法して一音によつて無量の音声を作ることができ、無量の衆生は一時に成道することができる。『安樂行義』では、不動の境地という空の認識から、衆生の差別を觀察し、その機の差別に対応して一切身を現わし、無量の說法をするという経過を辿る。つまり、法華三昧に至るには菩薩が衆生の機に応じて一念に一切身を現わすことと、一時に一音によつて無量の音

声を作りだして説法するという、この二つをもつて衆生教化をすることが不可欠であり、それを可能ならしめるのは徹底した空觀の達成から諸法実相を諦かにし、智慧を獲得していく行に始まるのであった。

三、無量義三昧

このような一時に無量の説法をするという慧思の思想の根本となるのが、『無量義經』であつたと思われる。

如是觀已。而入_レ衆生諸根性欲_一。性欲無量故。説法無量。説法無量義亦無量。無量義者。從_二法_一生。其_一法者。即無相也。如是無相。無_レ相不_レ相。不_レ相無_レ相。名爲_二實相_一。菩薩摩訶薩安_二住如_レ是眞實相_一已。所_レ發慈悲明諦不_レ虛。於_二衆生所_一眞能拔_レ苦。苦既拔已。復爲説_レ法。令_三諸衆生受_二於快樂_一。善男子。菩薩若能如_レ是修_二法門無量義_一者。必得_二疾成_一阿耨多羅三藐三菩提_一。

（同右・三八五下〜三八六上）

とあつて、菩薩は衆生の無量なる機根を見極め、それにともなつて無量の説法をするという。その無量の説法は実相である一法から生じたものであり、菩薩はこの眞実の相に安住して衆生を救うことができるという。『無量義經』ではこの無量の法義を生ずる依処である実相・無相の三昧のことを無量義三昧という名であらわしている。菩薩がこの義理を知れば速やかに無上道を成ずるとあり、空觀↓衆生の迷いの相の觀察↓実相を觀ずることで機に應じて一法より出た無量の説法を

行うという經過を辿り、最終的には、

諸佛無_レ有_二言_一。能以_二一音_一普應_二衆聲_一。能以_二一身_一。示_二百千萬億那由他無量無數恒河沙身_一。一_一身中。又示_二若干百千萬億那由他阿僧祇恒河沙種種類形_一。一_一形中。又示_二若干百千萬億那由他阿僧祇恒河沙形_一。

（同右・三八六下）

という仏の説法の境地まで至り、仏の説くところの真理は一つであり、しかしそれを衆生の諸々の求めに應じて様々な説き方をし、また無数の身やはたらきや形を示すという究極に至っていく。それは『安樂行義』の三忍の最後で述べられた、爲_レ度_二衆生_一。色身智慧對_レ機差別。一念心中現_二一切身_一。一時説法_一一音能作_二無量音聲_一。無量衆生一時成道。

（大正四六・七〇二中）

という法華三昧を極めるための不可欠の行が述べられるところと同じであり、慧思が『無量義經』からの影響を受けたことが窺える。しかし、『無量義經』ではこの無量義という法門により、空觀から諸法実相を觀じて、機に應じて衆生に法を説くという菩薩の進むべき道が説かれるが、一念に一切身を現じることが欠けており、それは『普賢觀經』の普現色身三昧によつて成就されるものとなる。

四、普現色身三昧

『安樂行義』の有相行は經典説誦の行でありその行が成就すれば三種陀羅尼と四眼が得られ、その内容から法華三昧の

行として『普賢觀經』が重要な經典となつてゐることがわかる。⁽⁶⁾そこで『諸法無諍三昧法門』には、

若欲^三說法度^二衆生一時。先入^二禪定^一。以^二十力道種智^一。觀^二衆生根性差別^一。知^二其對治。得道因緣^一。以^二法眼^一觀察。以^二一切種智^一。說法度^二衆生^一。一切種智者。名爲^二佛眼^一。亦名^二現一切色身三昧^一。亦名^二普現色身三昧^一。

(大正四六・六七二下)

とあり、深い空觀に達して衆生を觀察し、一切種智をもつて説法をして衆生を度す。一切種智とは仏眼でありまた現一切色身三昧とも普現色身三昧とも名づける。普現色身三昧とは『普賢觀經』にでてくるものであり、種々の色身を現じて衆生を化益する三昧である。『諸法無諍三昧法門』では衆生の教化を普現色身三昧をもつて成すことを述べ、また『安樂行義』の内容から三種陀羅尼と四眼は有相行によつて獲得されるものである。『普賢觀經』による有相行ではこの普現色身三昧に達することがその目的となる行であつたと思われる。また『普賢觀經』においても諸法実相を觀じていくことが重視され、ひたすら經典を説誦し法の空無相を觀じていき、

若欲^下滅^二此惡^一。永離^二諸塵勞^一。常處^二涅槃城^一。安樂心恬怕^上。當^下誦^二大乘經^一。念^中諸菩薩母^上。無量勝方便。從^レ思^二實相^一得^レ如^下此等六法。名爲^二六情根^一。一切業障海。皆從^二妄想^一生。若欲^二懺悔^一者。端坐念^二實相^一。

(同右・中)

とあることから、心を安樂ならしめんとするならば、大乘經

典を説誦することを勧め、無量の勝方便は実相を念ずること得るとある。こうして、『無量義經』と同じように実相を念ずることが衆生を教化する無量の勝方便(手段)を得る行(きっかけ)となつてゐるのである。

五、前方便理解

以上のことから、慧思の法華三昧は深い空觀に達してのち、実相を觀じて衆生教化のために無量の説法をし(無量義三昧)、一切身を現じていく(普現色身三昧)という過程を辿るのであるが、ここではまだ法華三昧とはならず未だ前段階にとどまる。では、最終的な法華三昧の意義とはどのようなものかという、智顗の『法華文句』では、

無量義者從^二法^一生。其^一法者所謂無相。無^レ相不^レ相名爲^二実相^一。

。從^二此実相^一生^二無量法^一。

(大正三四・二七下)

実相爲^二義處^一從^二義處^一出^二無量法^一。得^下爲^二無量法入^一義處^一作^上序。

(同右)

從^レ一派^レ諸取^レ諸歸^レ。開爲^二合序^一。

(同右)

とあつて、『無量義經』が『法華經』の序となり、それは実相という一義處から無量の法を出し、また一義處に入る(二に帰す)という過程を辿るからであるとする。つまり、無量の法を出す『無量義經』が一に帰すという『法華經』の序となり、最終的に『法華經』の一仏乘に帰着されるというのである。また慧思の『隨自意三昧』では、菩薩が無量の音聲や

色身を現するのは大慈悲をもつて衆生を度せんがためであるとし、そのためあら言葉や、優しい言葉等を使うのであり、そして、

如「仏仙所」説。麁言及軟語。衆解^レ音不^レ同。皆歸^レ第一義^一。

（新正統藏經五五・五〇五中）

として、無量の音聲や色身を普く現ずることも、皆第一義に帰すと述べられており、『法華經』の二に帰すという智顗の述べるところと一致する。このように、方便として無量の説法をしたり一切身を現じたりすることも、最終的には一仏乗を説く『法華經』の法華三昧に至ることで衆生教化の完結となり、この両三昧が法華三昧のための前段階となることが以上のことよりわかる。

まとめ

慧思の法華三昧はこのような経過を辿るものであるが、それには空觀から諸法実相を觀じていくという三經共通の一貫した思想を基とされていた。そして、慧思が智顗に前方便（前段階）であるといった理由として、その時の智顗の所証が空の大悟にとどまり、それは未だ三昧を得るための過程であったこと。又、慧思のいう法華三昧とは、まず無量義三昧及び普現色身三昧をもつてその前段階としたのであって、この二つにより前方便の理解が得られるものとする。

1 『別伝』大正五〇・一九二下～一九二上

2 横超慧日氏『法華思想の研究』平樂寺書店

3 橋本真昭氏『智顗の法華三昧について』慧思との比較を中心として 仏教学研究七

4 『安樂行義』大正四六・七〇一中～七〇二上 三忍の解釈として、菅野博士教授「慧思の『法華經安樂行義』の研究」東洋哲学研究所紀要第二十号

5 慧思と『無量義經』の關係について述べられたものとして、安達善教氏の「慧思における『無量義經』の影響」（仏教大学大学院研究紀要一五）がある。その中で、慧思の真撰とされるものに『無量義經』からの引用はないが、『無量義經』と慧思の教学との方向性（頓覺思想など）がたいへん似通っているため、慧思教学になんらかの影響をもたらしたと考えられるとしている。本論文では、『安樂行義』と『無量義經』に同一性が見られたことで、慧思の教学に『無量義經』の影響があるとみた。

6 大正四六・六九九上～中

7 新正統藏經五五・五〇五中

（キーワード） 法華三昧前方便、無量義三昧、普現色身三昧、慧思

（龍谷大学大学院）

7. Huisi's Preliminary Step in *samādhi* of the Lotus *sūtra*

Daigo TSURUTA

The *samādhi* of the Lotus Sūtra was taught to Zhiyi by Huisi on Mount Dasu. At that time Zhiyi reached a certain state. But Huisi judged what Zhiyi realized was the preliminary step. Huisi's preliminary step was to preach in accordance with the various living beings based on the Meaning of the Course of Ease and Bliss in the Lotus Sūtra. There are two ways. One is to preach infinite meanings in accordance with living beings, the *sāmadhi* with infinite meanings (無量義三昧). The other is to manifest various figures in accordance with living beings, the *samādhi* that manifest the various figures universally (普現色身三昧). After the two *samādhis* that manifest infinite meanings are obtained, the *samādhi* of the Lotus Sūtra that melds the infinite meanings into one is obtained. That is the perfect state at last.

8. The Meaning of *ganying* 感應 and *gantong* 感通 in Chinese Buddhism

Takeshige SUWA

Since the seventh century, several miraculous stories of Buddhism were edited in China. The famous historian of Chinese Buddhism, Daoxuan, understood those stories through the ideas of *ganying* and *gantong*. He interpreted the two words as having the same meaning, signifying specific and amazing phenomena about faith in Buddhism. His interpretation of the two words influenced later editors.

It is the aim of this paper to define Daoxuan's interpretation of *ganying* and *gantong* and its influence on later generations, and also to examine the role of miraculous stories in Chinese Buddhism.

9. On the Treatise on Two Bodies of the Buddha in the *Wangsheng lunzhu* 往生論註 and in the *Mahāprajñāpāramitopadeśa* juan 29

Nobuo SONE

No one has discussed the relation between the treatise on two bodies of